

〔翻 訳〕

# 嘉納治五郎による二編の柔道講演

- 〔1〕 「柔道の教育への貢献」
- 〔2〕 「柔道の原理とその人間活動のすべての面への応用」

〔訳〕 小野 勝 敏

## 訳者の前書き

嘉納治五郎 (1860-1938) は、生涯において 13 回の海外渡航をしている。渡航の目的は、欧州への教育視察、国際オリンピック委員会 (以下 IOC と略記する) 委員<sup>1)</sup>として各国で開催されたオリンピック競技大会ならびにその総会への出席そして貴族院議員としての万国議会同盟会議および万国議員商事会議への列席<sup>2)</sup>であった。

1889 (明治 22) 年の第 1 回目の外遊から、1938 (昭和 13) 年の第 13 回まで、中国、スウェーデン、ベルギー、スペイン、朝鮮、オランダ、アメリカ、ドイツ、イギリス、フランス、エジプト、ギリシャなどの各国<sup>3)</sup>を歴訪している。これらの歴訪を通じて嘉納は、世界の全国各地で柔道についての講演と実演を実施し、その紹介と普及に努めている。

1932 (昭和 7) 年 7 月 12 日、嘉納は、第 10 回ロサンゼルスオリンピック競技大会 (7 月 30 日-8 月 14 日) の出席と IOC における第 12 回大会の東京招致を目的として訪米への旅に出る<sup>4)</sup>。

アメリカに滞在中の 8 月 10 日、彼は南カルフォルニア大学で、THE CONTRIBUTION OF JUDO TO EDUCATION (柔道の教育への貢献) という題名の講演をする。

この邦訳が前編<sup>5)</sup>である。

後編は、Lecture on the Principles of Judo and their application to all Phases of Human Activity (柔道の原理とその人間活動のすべての面への応用) の邦訳である。この講演は、1934 (昭和 9) 年 6 月 9 日、嘉納がギリシャのアテネでの IOC 総会に出席の際、アテネのパルナッソス協会 (Parnassus Society) で講演と実演を行った時のものである。

〔注〕

- 1) 嘉納は、1909 年 5 月の IOC ベルリン総会において、アジアで初めての IOC 委員に就任する

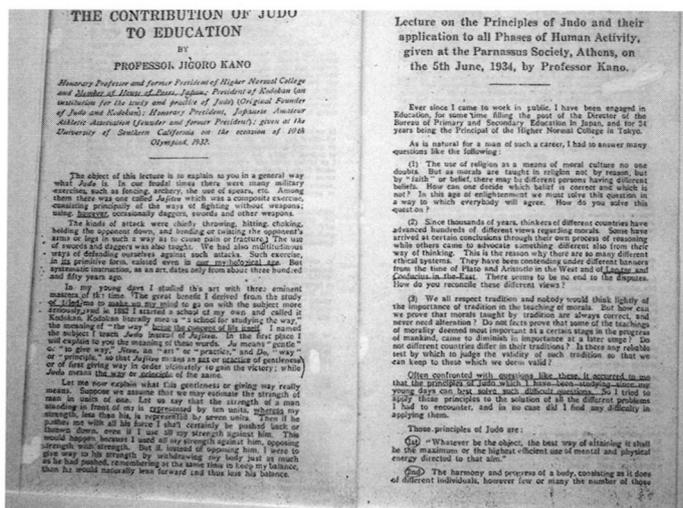


写真 1 〔小野〕 嘉納の講演文二編の原文各 1 頁目

(日本オリンピック委員会『近代オリンピック 100年の歩み』ベースボールマガジン社, 1994年, 95頁)。

- 2) 嘉納は、大正11年2月より昭和13年5月に逝去するまでの期間、貴族院議員(勅選議員)であった(『貴族院・参議院議員名鑑』1990年11月参照)。
- 3) 松本芳三編『柔道百年の歴史』講談社, 1970年, 80-1頁参照。
- 4) 1936年7月31日, ドイツのベルリンでのIOC総会において, 東京はフィンランドのヘルシンキを36対27で破って, 1940年の第12回オリンピック競技大会の招致に成功する(池井優『オリンピックの政治学』丸善ライブラリー, 平成4年, 10頁参照)。同時に, 1937年6月9日のポーランドのIOCワルシャワ総会で, 札幌での第5回冬季オリンピック競技大会の開催が採択される(日本オリンピックアカデミー編『21世紀オリンピック豆事典』, 2004年, 137頁)。

しかし(蛇足ながら), 1937年7月7日, 中国の北京郊外の盧溝橋事件をきっかけにして日中戦争が始まったことに起因して, 1938年7月16日に東京大会と札幌大会の両組織委員会は, この二

都市での夏季と冬季大会の開催をIOCに返上することになる。ちなみに, 紆余曲折を経た結果であるが, 1940年と1944年のオリンピック大会は, 夏季と冬季の両大会とも第二次世界大戦の勃発のために開催が中止となり, 近代オリンピック大会に第一次世界大戦に続いて, 二度目の大きな汚点を残すことになる。

- 5) アメリカのニール・オーレンキャンプ(Neil Ohlenkamp)のホームページには, 嘉納の講演文と嘉納の2枚の肖像画が掲載されている。但し, 理由は不明であるが, なぜか, 原文の64行分の箇所が割愛されている。

その末尾に, 次のような記載がなされている。

「この講演は, 嘉納治五郎によって, 1932年の第11回〔正しくは第10回-小野注〕オリンピック時にロサンゼルス南カルフォルニア大学でなされたものである。

1932年8月10日, ロサンゼルスオリンピックの一部として, ロサンゼルス競技場において同地区の約200名の柔道学徒が嘉納と一緒に柔道の公開競技を実施した。これがオリンピック大会への柔道の初登場であった」

(<http://www.judoinfo.com/kano.htm>)

## 〔1〕 柔道の教育への貢献

東京高等師範学校〔東京教育大学を経て現筑波大学-小野注〕前校長, 名誉教授, 貴族院議員。講道館(柔道を修行する道場)館長。柔道と講道館の創始者。大日本体育協会名誉会長(設立者, 前会長)。

1932年の第10回ロサンゼルスオリンピック時に南カルフォルニア大学にて講演。

今回の講演の目的は, 皆様方に柔道とは何かを概略的に説明することです。封建時代には軍事訓練として剣術, 弓術, 槍術などがあり, その中に柔術と呼ばれる複数の訓練が組み合わされたものがありました。それは主に武器を使わない戦い方から成り立っておりましたが, 時には短刀, 太刀, その他の武器なども使いました。

攻撃の種類は主に投げる, 打つ, 絞める, 相手を蹴り倒す, 相手の手足の関節を拉いだりするこ

とで, 相手に苦痛を与えたり骨折をさせたりすることなどですが, 同じく, 短刀や太刀の使い方も教わります。そして, 相手から受けるそれらの攻撃からわが身を守る様々な方法も教わります。これらの訓練は神話時代から初期の形態として存在しましたが, 術としての体系的な技法は350年ほど前にできあがりました。

若いとき, 私はその時代の卓越した先生方から柔術を学びました。そこで学んだことから導かれて私は柔術に, より真剣に取り組もうと心に決め, 1882年, 講道館という柔道塾を開校しました。講道館とは文字通り「道を学ぶ学校」という意味です。道とは人生そのものなのです。そして, 私は柔術という名の代わりに柔道と名付けました。まず最初にこれらの言葉の意味について説明します。「柔」とは穏やか, 委ねる, 「術」とは道, 本質という意味です。したがって, 柔術とは

穏やかさの稽古、あるいは初めに身を委ねて退くことで、最終的に勝利を得るための方法または原理なのです。

今ここで穏やかさと身を委ねることの本当の意味を説明させてください。まず一人の人間の力を単位1で考えたとします。例えば、私の前にいる人の力が10であったとし、私の力が相手より劣って7だった場合を想定します。この場合、もし相手が全力で押せば、私が全力で立ち向かって後ろに押されるか、はねつけられ倒されることでありましょう。これは力に対して力で対抗しているから起こります。しかしながら、私が相手に対し自分のバランスを崩さないままに、相手が押したと同じ力で身を引き、その力に身を委ねたとすると、相手は自然に前のめりになりバランスを崩します。この新たな姿勢によって相手は弱体化し、実際の肉体の力ではなく、ぎこちない姿勢のために、例えば、本来の10の力の代わりにその体勢の時、3の力になっていたとします。他方、私の方はバランスを崩さずに本来の7の力を保ったままです。この瞬間、私は相手に対して優位に立ち7の力を保ったまま自分の持つ7の力の半分の3.5の力で3の力に低下した相手を倒すことができます。この時点で残りの3.5の力を他に使うことも可能です。相手より自分の本来の力の方がもともと上であった場合、相手を押してもどすことが可能であり、なおかつそうしたいと思った場合でも、相手に身を委ねた方が力を節約できます [写真2参照—小野注]。

これが相手に身を委ねることで相手を負かす単純な見本です。他の例を挙げてみましょう。例えば、相手が私を横に崩して投げ飛ばそうとします (ここで助手と演じて見せたように)。もし、私がこれに抵抗しようとする、彼より力の劣る私は投げられてしまいます。なぜなら、私の力は彼に打ち勝つには十分ではないからです。しかしながら、もし私が彼に身を委ねると同時に (実演しながら) 相手を引き崩しながら自ら地面に倒れこんでいけば相手を簡単に投げることができます [投げ技の「真捨身技」—小野注]。

他の例を挙げましょう。例えば山の崖っぷちを

歩いている時 (実演) 男が突然飛びかかってきて崖から落とそうとします。この場合、もし相手に抵抗しようとする私は崖から落とされざるをえません。しかしながら反対に突き落とされようとした時点で相手に身を委ねて自分の体の向きを変えながら (実演) 相手を崖の方に引き崩すと私の方は簡単に相手を崖っぷちから投げて、自分の体は安全に地面に体をさばくことができます [投げ技の「横捨身技」—小野注]。

私はこれらの例をいかようにも広げることができます。しかし、もうすでに私がお見せしたことで十分に、どうやって相手に身を委ねることで相手を打ち負かすことができるか、お解りいただけたかと思います。柔術にはこの基本が応用される場合があまりにも多くあり、この柔術 (穏やかに身を委ねる術) という名がこの術の名となったのです。

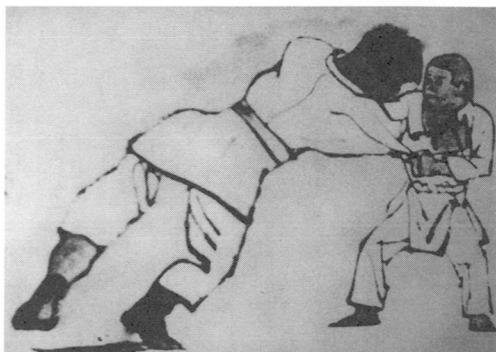


写真2 [小野] 「柔の理」の原理を表現している画  
(出所: 松本芳三編, 前掲書, 69頁。)

しかしながら、厳密に言いますと本当の柔術とはそれ以上のものであります。柔術によって相手から勝利を得るということは、ただ身を委ねることだけで相手から勝利を得ることのみとは限られません。時には身を委ねるということとは矛盾する、打つ、蹴る、絞めるなどの取り組み中に直接的に攻撃をすることもあります。

時として相手から手首をつかまれることがあります。いかにすれば相手のつかむ力から自分の力を使わずに逃れることができるでしょうか。同様に、後ろから抱きつかまれた場合はどうしたらよいのでしょうか。このように相手の力に身を委ねるという柔術の基本がすべてを包含できない場

合、本当にこれらすべてのことをカバーできる基本はあるのでしょうか。然り、存在します。そして、それは精神と肉体の最大効率での使用であり、柔術とはこの攻撃と防御の双方にわたる基本に他ならないのです。

この基本は人間の活動に応用できないものでしょうか。まさにこの同じ原理が人間のからだを強く健康で役に立つものに向上させることに応用することができ、そしてその原理の応用が頭脳と道徳を向上させ、精神と道徳の教育ともなるのです。同時にそれは衣・食・住、社会との交わり、商取引のうまさへと応用していくことができ、生活全般の修練とトレーニングとなるのです。私はこのすべてをカバーする原理を「柔道」と名付けました。ですから、柔道とは広い意味で精神と肉体の訓練であり、同じく人生と仕事の基であるのです。

ですから、柔道は攻撃と防御の稽古を主要目的として学習訓練できるものです。私が講道館を開く前には、この攻撃と防御の段階の柔道は、柔術の名のもとに日本だけで学ばれておりました。それは時には体術とも呼ばれ、体を巧みに扱う術、あるいはやわらと呼ばれ穏やかに扱う術として存在しました。しかしながら私は、だんだんと、ただ柔術を学ぶよりもすべてに関わる原理を学ぶ方がもっと大切だと考えるに至りました。なぜなら、この本当の原理を学ぶことは人生に応用できるのみでなく、柔術そのものを学ぶことにも役立つと考えたからです。

私が実践したこの道筋だけが原理を理解することに至る方法ではありません。日々の生活の活動の中から導き出される哲学的な解釈からも同じ結論を見出せるでしょうし、あるいは抽象的な哲学的論法からも同じことが導き出せるでしょう。

しかし柔道を教え始めてみて、私のとった方法でこれを学んだ方が賢明であると考えに至りました。なぜならば、そうすることによって門弟達のからだを健康で強く立派に育てることができると同時に、門弟を次第に広い原理の理解へと導くことができるからです。この理由により、柔道の

指導を「乱取」と「形」から始めました。

「乱取」とは自由演習のことで、実際の競技の方法で実践します。それは投げる、絞める、抑え込む、手足の関節を拉いだりすることすべてを含みます。二人の競技者は、自分の好きな方法で競い合いますが、お互いを傷つけないで礼儀を守ります。そして、このことは本当の正しい稽古のあり方に不可欠なことであります。

「形」とはかたちという意味で、前もって決められたかたちでの稽古です。それは打つ、切る、蹴る、突くなどを含み、競技者はお互いに相手の動きをすべて前もって把握している状態で立ち向かいます。打つ、蹴る、切る、突くなどの訓練は「形」のみで教えられ、「乱取」では教えられません。なぜならば、もしもそれらが「乱取」で使われれば怪我が頻繁に生じるからです。「形」では前もってすべての攻撃と防御が決められているので怪我はおこりにくいのです。

「乱取」は、いろいろな方法で稽古できるでしょう。もしも、その目的がただ攻撃と防御の訓練だけであつたとするならば、からだの発育および精神や道徳に関する考慮をしないで、ただより効果的に投げたり拉いだり捻ったりする練習をするだけです。「乱取」の主要目的としては体育の範疇に取り入れられるでしょう。今までお話ししてきたとおり、最善活用 of 原理のために、何でも良いことは取り入れられるべきです。

今なされている体育教育がこのことに合致しているか見てみましょう。

運動競技全体を見てみます。私にはそれらが理想的なかたちだとは思えません。なぜなら、動きのすべてがからだ全体の発育のためでなく、他のある目的を達するためのものだからです。そして、それにも増して、ふつう特殊な装備を必要とし時にはかなり多くの人数が参加するため、その中から人を選択するためのものとなっているのです。ですから、国民全体の体力の向上に役立っていないのです。そのことはボクシングやレスリングそして世界中で行われている軍事訓練に当てはまります。

そこでこのような質問：はたして国民全体のト

レーニングとなる体操はあるのかという質問が出てきます。

その答えとして私は、からだ全体を発達させることがまさに体育教育の最も理想的なかたちなのではないかと言いたいのです。それは、必ずしも特別な道具や選ばれた参加者を必要としないのです。しかし体操には国民全体の体育教育に最も大切なことが欠けています。欠点を挙げてみます。

- 1 体操のいろいろな動きは無意味で当然そこから得るものはない。
- 2 そのトレーニングからは二次的効果は生まれない。
- 3 ある「技術」の習得は（技術とは特別な意味で）体操と同様に他の運動からも捜し求められない。

このように体育教育を概括的に見ても、未だかつて必要条件を満たした理想的な体育は考案されていません。

この理想的なかたちとは最善活用に基づいて考案されるものであり、このようなすべての条件、要求を満たすものであり、からだ全体の発育を第一に考慮したものでなければならぬのです。もう一度言わせていただきますが、活動は広い場所を必要とせず、特別な服装や道具を必要としないものでなくてはなりません。それ以上に、その活動は集団のみでなく個人でもできるものでなくてはなりません。

これらが国民全体を満足させることができる体育方策の必要条件なのです。これらの条件を満たすことができるシステムこそが初めて最善活用の原理にのっとった体育教育のプログラムとみなされるのです。

私自身、この問題に長い間取り組んできましたが、ついにこれらすべての条件を満たすと言える二つの形態の考案に成功しました。

一つは私が「代表する形態 (representative form)」と名付けたものです。これは思考や感情や自然の種々の動きを手足、からだ、首を使って表現することです。舞踊はまさにその例なのですが、舞踊とはもともと体育を目的としてできたものではないので、これらの条件を満たしているとは言えません。そしてさらに、私達は一般的に特殊な装備

と時にはそれに参加するためのかなり多くの人数を必要とするので、運動競技は精選された人々に鍛錬として適して、国民全員の身体的状態の向上の手段としてではありません。しかしながら異なる性別、精神、身体的状態の人に適するために考えられた、また道徳的な観念や感受性を表現するために考えられた特別な舞踊を考案することは可能です。それゆえ、国民の精神面の育成を共に持ち合わせた上で、すべての人々に相応しい方法において身体を成長させることも可能です。

この形態の「代表する形態」というのはアメリカやヨーロッパであれ、これが実践されていますので——私が何を言いたいのかお解りいただけると思いますが——これ以上深く追求することはしません。

他方、私が「攻撃と防御の形態」と名付けたもう一つの形態があります。この中で私は異なる方法での攻撃と防御を組み合わせることでからだ全体の調和のとれた発育を導き出すことができるようにしました。通常の柔術で教えられる方法での攻撃と防御から作り出されるのは理想的な肉体の発育とは言えません。ですから、私は特別な組み合わせ方を工夫して調和のとれた肉体の発育に必要な条件を満たすようにしました。

これは二つの目的に合います。

- 1 肉体の発育
- 2 競技における技術のトレーニング

すべての国が国防を必要としているように、すべての個は個を守る方法を知る必要があります。この啓蒙時代に人々は誰も、国の侵略や個々の暴力に対して備えることをしません。

しかし、正義や博愛のための防御は国や個人によって決して無視されるべきではありません。

攻撃や防御における体育の方法を実際に実施することであなた方にお見せします。これは二つの種類の運動に分けられます。一つは一人だけの運動です。もう一つは実際に示したように相手との運動です。

実演をして私が説明したことや示範したことから、私が最善活用の原理に基づく体育とはどういう意味で言っているのかを、あなた方は確かに理解なさったでしょう。国全体の体育はその原理に

基づいて行われるべきだということを私は強く主張しますが、同時に運動競技や他の格闘競技をほとんど重要視しない、ということを行っているではありません。それらは国全体の体育として適切であると考えられないが、しかしある人々の集団の文化としてそれらは特別な価値を持つものがあります。そして、私は決してそれらを特に柔道の乱取をおろそかにしたくないと思っています。

乱取の一つの偉大な価値はそれが肉体的発達のために与える動きの豊富さにあります。もう一つの価値は、すべての動きには何か目的があり、精神を伴って実施されるということです。他方、普通の体育の運動においては、その動きには関心をそそるものが欠けているということです。柔道における体系的な肉体鍛錬の目的は肉体を発達させることだけでなく、また次のことも言えます。つまり、男女学習者に、自己の心身を完全に管理することを可能にさせたり、全くの不慮の事故からであろうと他人からの攻撃からであろうと、どんな緊急事態にも対応できることを可能にさせることです。

柔道の稽古は一般に、乱取や形の双方において、その目的のために特別に準備された道場で二人の間で行われますが、そのようなことはいつも必要であるとは限りません。柔道の稽古は運動場や普通の部屋で、集団によってまたは一人で実施することができます。人々は、乱取で倒れると苦痛、時には危険が伴うと想像します。しかし、倒れ方の簡単な説明を聞けば、人々はこのような苦痛や危険は全くないということを理解できるでしょう。

続いて、柔道の知的な面についてお話ししましょう。

柔道の知的鍛錬は乱取と同様に形によってでもできます。しかし乱取による方がもつとうまく成功できます。乱取は、自由に使える手段をすべて使用しながら行う、また柔道の所定の規則に従いながら行う、二人による競技であるので、両者は常に油断なく警戒し、相手の弱点を見出すよう努めなければなりません。そして機会がある時はいつでも攻撃する用意をしなければなりません。攻

撃手段を考案するこういった精神態度によって、門弟は、すべてのふるまいにおいて、まじめで、誠実で、思いやりがあり、注意深く、慎重になる傾向があります。同時に、門弟は機敏な決心や敏速な行動をするように訓練されます。なぜなら乱取では、機敏に決心したり、敏速に行動しないと、人は攻撃においても防御においても常に自分を失ってしまうからです。

繰り返しますと、乱取において各競技者は自分の相手が何をしようとしているのか解りません。だから各々は常に、相手からのどんな突然の攻撃にも対抗する準備ができていないといけません。こういった種類の精神態度を身につけていると、自分・本人は高レベルの精神的平静さつまり「威厳のある落ち着き」を育て発達させることとなります。体育館や道場で注意力や観察力を働かせることによって、自然とこのような力を伸ばすこととなります。その力は日常生活に特に有用なものなのです。

相手を負かす手段を考案するためには、想像力、思考力そして判断力を働かせることが絶対必要です。そして、こういった力は乱取で自然と修得されます。さらに、乱取の研究は二人の競技者に存在する精神的および肉体的関係の研究なので、何百という価値の高い稽古はこの研究に由来しているかもしれません。しかし当面は例をもう少し示すことで満足しましょう。乱取では私達は門弟に、自分の相手が自分にはどんなに肉体的に劣っているように見えようと、またたとえ自分が圧倒的な強さで相手に打ち勝つことができても、柔道の基本的な原理に基づいて常に行動するように教えます。もし門弟がこの原理に逆らって行動すれば、相手はたとえどんな容赦ない強さであらわれても、自分の敗北を確信しないでしょ。あなた方に、次に述べるような事実に対して注意を促す必要はほとんどないでしょう。つまり、論争であなたの相手を納得させる方法は、力や、知識や、富においてであろうと、あれこれと相手より有利な点を突き出すのではなく、論理に関する犯すことのできない原則と合致して相手を説得することである、という事実です。このことは、

強制ではなく説得が有効であるということを教えています。それは実生活において貴重なことですが、私達は乱取から修得することができるのです。

さらに、私達は門弟に、本人が相手を打ち負かす際に策を講じる時、課題となっている目的達成のために確実に必要とされるだけの力を使うように指示します。つまり、自分の力を多く使いすぎないように、また力が少なすぎないように警告します。どこで止まったらいいかわからず、単に度を越したために人々が失敗する例はかなりたくさんあります。逆もまた同様です。

さらに別の例をとりあげますと、乱取では私達は門弟に、取り乱したように興奮している相手に直面する時、まさに力で敵対することによるのではなく、相手の激しさや力が使い果たされるまで相手と競技することによって相手から勝利を得るように教えます。

他者との日々の関わり合いにおいて、こういった心構えを維持する有効性は明白です。よく知られているように、あまりにも興奮して平静さを失ったかのように見える人に直面する時、どんなに論理的に思考してもそこから私達は利益を得ることはできません。こういった場合、私達がしなければならぬことはただ、この激情がそれ自身尽きるまで待つことです。こういったすべての教義を私達は乱取の稽古から修得します。日常生活の行為へのそれらの応用は、非常に興味深い研究課題であり、若い人達にとっての知的訓練として価値が高いものです。

柔道の知的面についての私の話を、知識や知力を増加させる合理的な方法に手短かにふれることによって終えたいと思います。

社会を綿密に観察すれば、知識を修得する際、自分の精力を愚かに使い果たすやり方に、至るところで気づきます。すべての私達の環境は常に私達に役に立つ知識を得る機会を与えています。しかし、私達はたえず、こういった機会を最高に利用することに注意を払わないのではないのでしょうか。私達は私達が読む本、雑誌、そして新聞をいつも最も有効に選択しているのでしょうか。有用な

知識を習得するために使われたかもしれないような精力が、自己だけでなく社会にとっても不利になる知識を蓄積するためにしばしば使われるということに、時々私達は気がつかないのではないのでしょうか。

有用な知識の習得の他に、私達は、記憶力、注意力、観察力、判断力、思考力、想像力などを高めるように努めなければなりません。しかしこのことを無計画なやり方で行うのではなく、心理学上の原則と合致して行わなければいけません。その結果こういったそれぞれの力の関係はうまく調和されるでしょう。私達が知識や知力を合理的に増やす目的を達成できるのは、精力最善活用つまり柔道の原理に忠実に従うことによるのみなのです。

私は今から柔道の道徳面についてお話しします。

世界中で運動競技において重要視されている礼儀、精神力、そして忍耐、他人に対する親切心や敬意、そして公平や公明正大という、通常の原則を順守するといった、道場で門弟達に与えられる道徳鍛錬についてお話すつもりではありません。柔道の訓練には日本では特別な意味があります。なぜなら他の格闘競技とともに柔道はサムライによって実践されました。サムライは高水準の道義心を持っていました。道義心の精神は技術の教えを通して私達に伝えられてきています。これに関連して、精力善用の原理は私達が道徳的行為を増進させるのにいかに役に立つのかを説明したいと思います。人は時々ささいな理由からとても興奮しやすくなったり、また怒りやすくなったりします。しかし人が、興奮することは精力を不必要に消耗することであり、誰にも利益をもたらさず、しばしば自分自身や他人に害を与えることとなる、と考えるようになる時、柔道の修行者はこういった行為をしないようにしなければならぬ、ということが分ります。

人は時々失望から落胆したり、憂鬱になったり、働く気力がなくなったりします。このような人にとって、柔道は、存在する状況下において自分ができる最良のものは何であるかを見出すような忠告をすることになります。矛盾しているかも

しませんが、このような人は成功の頂点にいる人と同じ位置にいると私には考えられます。どちらの場合も、次に来るのはたった一つの行動、つまり、その行動とは十分思考した後その人がその時最良の行動であると考えているものです。このように柔道の教えによって、人は、失望や無気力の深みから未来に対する明るい希望を抱いた精力的な活動状態へ移行するであろう、と言えるでしょう。

同じ論法を、不満を抱いている人々にも応用できます。不満を抱いている人はしばしば陰鬱な精神状態にあり、自分自身の誤りであることに對して他人を責めたりして、自分の本分を忘れていることです。柔道の教えによって、こういった人々は、このような行いは精力善用の原理に反するものであることを理解したり、その原理を忠実に遂行することによって、自分はもっと快活になるということをはっきりと理解するでしょう。このように柔道の教えは様々な方法で、道徳的行いを促進させるのに役に立ちます。

最後に、柔道の感情的な面に関して少し付け加えたいと思います。私達は皆、練習を通して神経や筋肉に与えられる爽快な感覚に気がつきます。そして、筋肉を使つての技術獲得に對して、また競技において他人より優越であるという感覚を通して、喜びを感じます。しかしこういった喜びの他に、美しさを愛する気持ち、礼儀正しい姿勢をとること、礼儀正しい動きをすること、また他人の中にそのようなものを見ることから感じられる喜びがあります。いろいろな考えを象徴する多様な動きを見ることから得られる喜びとともに、これらにおける鍛錬は、いわゆる柔道の感情的なまたは審美的な面を構成しています。

あなた方は、封建時代の柔術と對比して、柔道とは本当にどういうものであるかということを手で解つてこられたと私は信じています。

私がすでに述べたことを簡潔な形で言明すれば、次のように要約できます。

柔道とは、人の生活と関心事の規制におけるのと同様に、精神や肉体における研究や鍛錬なのです。攻撃防御の様々な方法に對する徹底した研究

を通して、私は、これらすべての方法は一つの、全体に普及する原理の応用に依存するということを確認しています。すなわち、「目標が何であろうと、それは、その目的達成のために心身を最高にまたは最善に利用することで獲得できる」ということです。攻撃防御の方法に應用されるこの原理が柔術を構成しているように、生き方や職務遂行の仕方へ應用されると同様、肉体的、精神的そして道徳的文化に應用されるこの同じ原理は、これらのものの研究や鍛錬を構成します。

一度この原理の本当の重要性が理解されれば、それは生活や活動のすべての面に應用されるでありましょう。そしてそれによって人は最も高尚で最も道理をわきまえた人生を送ることが可能となります。

この原理を本当に理解するのに、必ずしも攻撃防御の方法における鍛錬である必要はありません。しかし、私はこういった方法での鍛錬を通してこの考えを思いつくようになったので、競技における訓練や、原理に到達する通常の手段である肉体の発達のための鍛錬を大に行いました。

この精力善用の原理は、それが攻撃防御の技において精神と肉体の調和に應用される時と同様、社会生活を高めたり、完全なものにしたりすることに應用されると、その構成員間の秩序と調和をまず要求します。そしてこの原理は、相互の援助と譲歩を通してのみ獲得できるのであります。そしてそれは相互の繁栄と利益へと繋がっていきます。

それゆえ、柔道の最終目標は、人の心の中に最善活用と相互繁栄と利益という原理に對する尊重心を教え込むことです。そして、人が、個人的にも集团的にも最も高尚な状態にたどることができ、同時に肉体を発達させ、攻撃防御の術を修得できるように、その人にそれらを実行するように指導します。

もし私達が世界中の社会の實際状態を綿密に観察すれば、宗教上の、哲学上の、伝統上の、いわゆるすべてのかたちにおける道徳によって、人は社会においてその行動を改善させることになることや、その道徳によって世界が理想的なものになるように意図されている、という事実にもかかわ

らず、その事実は全く反対であるように見えます。私達は最も高いものから最も低いものまで、社会のあらゆるレベルで、悪徳、不和、そして不満に気づきます。子供時代から大人まで学校で衛生学や正しい生き方を教えられる一方、私達は依然として、正しく清らかな暮らしや衛生的で整然とした生活の規律を無視する傾向にあります。

実際の事実は、私達の社会は何かあるものが欠けているということを証明しています。その何かとは、明るみに出され、至るところで認められれば、現在の社会を改造することができ、この世界にもっと大きな幸福や満足をもたらすことができるものです。これは精力善用と自他共栄の教えです。

昔からの道德規範や衛生観は取りやめられるべきであると言っているではありません。それどころか、そういった規範や忠告はかつてそうであったように常に尊重されるべきです。しかし、これらに加えて、精力善用と自他共栄という私達の原理は常に主要なものであるべきです。

このことを私は強調して言います。なぜなら、批評や新しい考えの現代において、効果をもたらすどんな教義にとっても、その教義には背後に明白な理由や事実がなければいけません。

私達は、思慮深い人が今日次のように言っているのに耳を疑います。つまり「私はこういうことを信じているので、あなたもそのことを信じなければいけない」とかまたは「私は自分自身の思考からこういった結論に達したので、あなたも同じ結論に至らなければならない」ということです。人が断言することは何でも、健全な人が否定したり疑いを抱くことのできないような事実や論法に基づいたものでなければなりません。確かに、誰も次の原理の価値を疑うことはできません。「目標が何であろうと、それはその目的達成のために心身を最善活用することによって最もよく獲得できる」ということです。

もう一度言いますと、社会のすべての構成員が

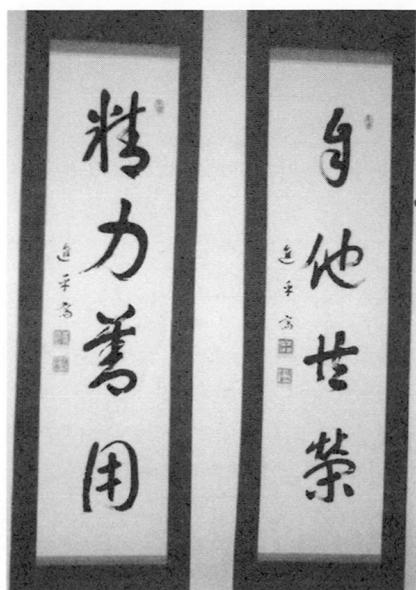


写真3〔小野〕 嘉納の揮毫による柔道思想二幅の掛け軸  
（出所：Kodokan, Judo, p.91.）

争いや不和をせず、平和や繁栄の下に暮らすことができるのは、自他共栄を目指すことによつてのみ可能であるということも誰も否定することはできません。それは、人々が効率性や科学的管理についてとてもよく語るようになってきたという事実、またこれらが、至るところで主張されているという事実が全世界的に認識されているからではないのでしょうか〔写真3参照—小野注〕。

これに加えて、互譲の精神は人間の生活における決定的な要素と益々なりつつあります。それは、私達が国際連盟を形成するようになったことや、また世界列強国が陸海軍の軍備縮小のために会合するようになったのは、この自他共栄の原理が承認されているからではないのでしょうか。こういった動きはまた、自他共栄を緊急に必要としているということを必然的に承認しているということを示しています。それらは、柔道が重要な役割を果たしているすべての国の教育界によって育成されなければなりません。

## 〔2〕 柔道の原理とその人間活動のすべての面への応用

1934年6月5日、嘉納師範によるギリシャのアテネのパルナツス協会 (Parnassus Society) での講演。

公共の場で仕事をするようになって以来、私はずっと教育に携わってきています。ある期間、日本の初等、中等教育学校の校長を務めたり、また24年間東京高等師範学校の校長を務めてきました。

このような経歴の持ち主にとっては当然のことですが、私は次に述べるような多くの質問に答えなければなりません。

1) 誰も宗教の用途を道徳に関わる文化とみなすことに疑いを抱きません。しかし、道徳は、宗教においては道徳によってではなく、信仰、信念によって教えられるので、違った信念を持った異なった人たちがいるかもしれません。人はどの信仰が正しく、どれが正しくないかを、どのようにして決断するのでしょうか。現在、啓蒙時代において、誰もが同意する方法でこの問題を解決しなければなりません。この問題をあなた方はどのように解かれますか。

2) 何千年もの間、様々な国々の思想家達が、何百という道徳に関するいろいろな見解を提案してきています。彼ら自身の論法の課程を通してある結論に達した思想家もいれば、また自分自身の思考方法から何か違った説を主張する思想家もいました。こういう訳から、非常に多くの違った倫理学説が存在するのです。彼らは、西洋におけるプラトンやアリストテレスの時代から、そして東洋における老子や孔子の時代から、違った旗印の下に論争しています。こういった論争は終わりがないように思えます。あなた方はどのようにしてこういった様々な見解に調和されますか。

3) 私達は皆伝統を尊重します。そして、道徳を教える際、誰も伝統を守る重要性を軽視しないでしょう。しかし、伝統によって教えられる道徳

はいつも正しく、変更される必要は決していない、とどのように私達は証明できるのでしょうか。人類の発展過程の中で、ある時期最も重要であると考えられていた道徳の教えのいくつかは、後の時期になってより重要でなくなってきたことを、いろいろな事実が証明してはいないでしょうか。違った国々では伝統、習慣が異なってはいないでしょうか。私達が正当であると考えた伝統を守ってけるように、そういった伝統の正当性を判断する信頼のできる基準はあるのでしょうか。

このような質問に時折困惑しながら、私が年少の頃からずっと研究してきている柔道の原理が、最もよくこのような難しい問題を解くことができるのではないかという考えが私に浮びました。そこで私は、私が直面しなければならないすべての違った問題を解決するのに、この原理を応用することを試みました。そして、どの場合においてもその原理を応用することに何の苦勞もありませんでした。

柔道の原理とは次のようなものです。

第一番目 目標が何であろうと、それを成し遂げる最良の方法は、その目標達成のために向けられた精神のおよび肉体的精力を最大限にまた最も効果的に使用することでしょう。

第二番目 からだの調和や進歩は、それが様々な個体から成り立っているように、各個人の数が少なからうと多からうと、相互援助や譲歩によって一番よく保持され、獲得されるのです。

私に時間があって、パルナツス協会が、私が自分の結論に達した課程を説明することをお許しくださるのなら、あなた方にとって私がお話する本当の趣旨を理解することはとても興味深いしより簡単でしょう。しかしながら、その部分は他の機会にされる講義に残しておき、私はこれから、こういった原理をどのように人間活動の様々な面に応用すべきかを明らかにしたいと思います。

日本の封建時代においては、剣術、弓術、槍術など、多くの格闘技がありました。その中に、「柔術」と呼ばれる格闘技がありました。時折何らかの武器が使われることもありました。それは主に、武器を使わずに戦う様々な方法から成り立っていました。青年の頃私は、当時の3人の高名な師匠のもとに、この柔術に関する二つの流派を学びました<sup>1)</sup>。さらに私は、他の流派を代表する多くの他の先達者からも教えを受けました。しかし、「柔術」は本来、原理学の論争に適用されるものではなく、単に、様々な名人によって考案された攻撃と防御に関する違った方法のことを言います。例えば、ある流派は一人の達人によって考案された方法を代表し、他の流派は他の達人の方策を現しています。こういった事情なので、こういった流派の正当性を検証する基本的な原理は全くありません。

このことから、私はこの課題を深刻に研究するようになりました。そして私は、全体を網羅する原理の一つを導き出すことになりました。つまり次のようなことです。目標が何であろうと、その目標達成のために向けられた精神的、肉体的精力を最大限に効果的に働かせることによって、目標は一番よく達成されることができるということです。

さらに私は新たに、自分の研究が及ぶ限り、私の時代以前の異なった名人によって教えられた攻撃と防御のすべての方法を調査研究しました。そこで私は、多くの他の方法はできないが、この検証に耐えうる方法がたくさんあるということを見出しました。私が有効と思う方法を蓄え、また検証に耐えうると私が自信を感じる、私独自の考案による多くの他の方法を追加して、私は1882年に攻撃と防御に関する独自の体系をまとめました<sup>2)</sup>。「柔道」はこの基本的な原理の名前です。「柔道」はまた同様にそれを応用した原理の名前でもあります。一方、「柔術」はこういった原理に基づいていない様々な流派群の名前です。私はこの原理が研究される道場、そしてその応用が教えられる道場を、「講道館」と名付けました。それは文字通り、「道を学ぶ学舎」という意味です。

この新しい試みはとても成功しました。日本では今日、古い方法は誰も学ばず、柔道が、軍隊、海軍、警察におけると同様に、ほとんどすべての中等学校以上の教育機関において教えられています。そして新しい名前「柔道」に、「柔術」という名前からほとんど変えられています。競技方法に精力の最善活用という原理を応用することによって私は、体育関係において同様の試みをするのは賢明であると考えようになりました。

この事柄を扱う際、私はまず最初に体育の目的は何であるかを明らかにしなければなりません。私は、体育の目的は少なくとも次の4つの項目を含むべきだと確信しています。つまり、知性的、道徳的、そして美的な面を包含する健康、体力、実用性、精神修養であります。

誰もこの見解に異議を唱えないでしょうが、体育の専門家でさえ誰もこういった4項目のそれぞれの重要性を学んでいるようには見えない、という事実に聴衆の皆様方に特に注目していただきたいと思います。体育の指導者の多くは強さと技術を磨くことを強調しすぎてはいないでしょうか。体育の先生方は精神的機能や体の調和のとれた発達にほとんど全く注意を払っていないのではないでしょうか。

人々は当然こういった誤りに陥ります。なぜなら、体育の目的がはっきりと定義されていないからということと、こういった4項目が深刻に学ばれていないからです。「精力善用」という原理がまだ普遍的に認められていないということから、またこの原理の視点から課題を研究しているように思える人がほとんどいないということから、人はこういった誤りをします。

この課題についてこれ以上深く論じませんが、私がそのテーマについて書いた小冊子をここに残します。そうすればどなたかがそれを参考書として利用するかもしれません。

さらに私は、この原理を道徳および知性に関する訓練へ応用することについてお話しします。

体育の4項目に関連して私が述べた時と同じように、知性と道徳の相互関係は、これら二つの鍛錬と肉体的鍛錬の関係と同様に、深刻な研究題目

となるべきです。しかしながら、一般の人々だけでなくまた教育者もこのことに全く無関心です。知的鍛錬においては、厳密に言えば、知識の獲得や知力の養成は相互関係が明らかなので、それらは別々には扱われません。それでも、思考力や、判断力の養成と知識の単なる獲得は違った見解で見られるかもしれません。そして、それらが知的鍛錬において持っているそれぞれの貢献は、特別に研究されるべきです。

道徳もまたいくつかの項目を包含しています。そして、こういった項目の相互関係や相対的な重要性は注意深く考慮されるべきです。

まず第一に、すべての道徳は知性的な面から追及されるべきです。それによって人は、何が正しくて、何が間違っているかを知ることができ、また複雑な状況下でも解決を見つけたり、決断することができます。同時に、情緒面や意志力の育成は、よい習慣を身につけることの重要性と同様に、忘れられてはいけません。しかし、こういったことを深刻に学んでいる人はほとんどいないように思われます。このことはまた、精力善用という原理の認識不足によるもの、と私は信じています。

教養とは、それが肉体的、知性的、道徳的なものであろうと、その教養に含まれる様々な項目の相対的な重要性や相互関連について正当な思考がなされた時だけ、正確に獲得されるものです。

次は、大抵の人々がどのようにして日常生活において、この非常に重要な原理に無頓着であるかを表す、とても簡単な例を示しましょう。人は、本や雑誌、新聞を読まなければならない時いつでも、その時読むのに最も有益であると考えられている多くのものから選択をすることでしよう。しかし大抵の人々はこういった項目について気かけなさすぎます。

同じようなことが、衣類、食事、住居に関しても言えます。また私達が買うものを選択する時や、仕事上の処理の際、一口に言えば、人生におけるすべての日常の関係においても言えます。この原理の正しい理解と正確な応用によってのみ、人は自分のからだを強く、健康で、有用なものにできるのです。人は道徳的、知性的な面ですぐ

れている人間になることができます。人は富を蓄積することができます。つまり自分自身を幸福にするためだけでなく、他人を助けるための、また社会のために使うことができるための十分な富を蓄積できるのです。私達の原理に忠実な人だけがこういった人間になることができます。

このように、もしこの原理が人間活動のすべての面に応用できるなら、同じことがあるグループの人たちの活動に関しても正当でなければなりません。そのグループが、数人からなる小さい集まりであろうと、人口の多い国の場合のように大きい集まりであろうと、そうでなければなりません。しかし、個人として行動するグループの人にとって、グループのすべての構成員がお互いに調和をもって行動できるように、それはうまく組織されていなければなりません。この調和は自他共栄によってのみ獲得され、保持されるのです。そしてこの調和によってお互いが幸福と利益を得るのです。それゆえ、この自他共栄は柔道のもう一つの基本的な原理です。その原理は自分自身を鼓舞したり社会生活を完全にするのにとても重要です。それでは、この同じ原理が同じ方法で国際関係にも応用できないものでしょうか。

私が万国議会同盟会議 (the Meeting of the Inter-parliamentary Union) において、マドリッド<sup>3)</sup> 訳注) で昨年行ったスピーチの一部を引用することによって、私の講演を終えたいと思います。「幸運にも、国際的な生活という概念は教養人の間ではあまり違いは見られません。しかし、異なった人々に同じ概念を抱かせるためには、背景に何が存在するのかということを尋ねられると、恐らく人は困惑するかもしれません。信仰を背景に持つ宗教という道徳観念はそれを説明できません。なぜなら、すべての信仰は一致するべきという理由は全くないからです。それでは哲学の多様な学説は、こういった一致をもたらず影響力として考えられるのでしょうか。それは哲学では模索できません。なぜなら、こういった哲学の諸学説はお互いに離れた存在であり、決して調和しないからです。」

「それでは、このような共存をもたらず、本当

に影響を与える力とは何でありましょう。」

「影響を与える力はここにあります。社会で暮らしている教養人は、社会生活を中止したり、他人と全く引き離されて生きていくことを夢にも思いません。共同社会の構成員でありたいと願う限り、人は、社会が存在しつづけ、その崩壊を防ぐために自分の役割を果たすことが自分の義務であると考えてに違いありません。換言しますと、人が社会に生きている限り、人はその人自身、社会の進展によって利益を得るということです。他方、もし社会が悪化すれば、人はもしそうなれば得ることができるであろうものを失うこととなります。社会生活を保つために、すべての個人は自己本位の行動を慎む方法を知らなければなりません。そしてその目標を承認し、目標を達成するのに必要な時はいつでも他人を助けなければなりません。同時に、人は社会に尽くすために自己の能力を最大限利用して努めなければなりません。また、他人や一般社会の関心事と衝突しない限り、自分自身にも気を配ることを忘れないように注意しなければなりません。自分自身と同様に社会の利益に役立つことは、そういった指示のもとに心身の力を最も有効に使うことで達成できるので。要するに、一方において自分の目的を達成するために心身の力を最大限使用することと、他方において自他共栄を目指す相助相譲は、社会の調和と進展をもたらす二つの偉大な影響力となります。意識的であろうとなかろうと、こういった要因に導かれています。人々が現在、効率性や科学的管理についてよく語るという事実や、国際連盟が創設されたという事実、そして安全と武装解除が今日顕著な課題となっているという事実、これらすべての事実、これらの要因が完全に研究さ

れるべきであること、またこういった要因の精神は、全世界に公言されるべきであることを示しているのです。

[訳注]

- 1) 嘉納治五郎は、1881(明治14)年7月東京大学文科大学(政治学、理財学)を卒業する。その後、文科大学の道義学および審美学の選科に再入学し、1882年7月に同科を卒業する。  
嘉納は、東大に在学中の1877(明治10)年天神真楊流の福田八之助に入門し、初めて柔術を学ぶ。福田の没後、福田の師匠である天神真楊流第3代の家元である磯正智に弟子入りする。1881年6月磯の没後、起倒流の飯久保恒年の門下生となった。  
このように嘉納は、1882(明治15)年5月に講道館を創始するまでに3名の師匠より、柔術の2流派を学んだことが明らかになる(嘉納先生伝記編纂会『嘉納治五郎』講道館、昭和52年、32-45頁参照)。
- 2) 1882年2月に嘉納は、東京の永昌寺で塾生に柔道を教授し、5月に講道館柔道を創立する。したがって、この時期にはまだ柔道の体系は完成していない。講道館の技術体系が確立するのは1889(明治22)年前後である。また、その精神面の完成は、1922(大正11)年の講道館文化会の創立を待たねばならなかった(嘉納先生伝記編纂会、前掲書、308頁参照)。
- 3) 嘉納は、1933(昭和8)年10月4日より10日まで、スペインのマドリードで開催された万国議会同盟会議に列席した。その折に、柔道に関する講演をしたものと推察できる。前述したように嘉納は、世界の全国各地で柔道の紹介と普及のために講演とデモンストレーションをしているが、今回邦訳した二編の他にまだ未発見の原稿・資料が存在するのかどうか不明である(嘉納先生伝記編纂会、前掲書、733頁参照)。